強制労働をさせられていた。

この地での抑留期間二年五か月、ようやくダモイ（帰国）の命令によってウラウデンの町に集結したのが昭和二十三年四月であった。本当に長い長い悪夢にうなされたような期間から解放された。そして待望のナホトカに着いた。

しかし私たちは、またもやここで約一年四か月ほど、待ちぼうけを食わされたのである。ナホトカでの待機中は木材伐採と搬出というここでも重労働と「ノルマ」と「ダワイ、ダワイ」の連続であった。こうなると私たちは何を、だれを信じてよいかわからなくなり、心理的不安が重なり、やがては仲間同士がつまらないことでののしり合ったりの人間不信が高まっていった。

昭和二十四年九月末、帰国が確実となり輸送船上の人となってはじめて〝ダモイ〟を身にしみて感じたのである。

反戦の願いをこめて

長野県　西村又夫

昭和二十年八月、満州昌図で終戦。混乱の中で九月四平においてソ連の武装解除を受ける。しばらく待機の生活が続く。

十月にはいりソ連軍の監視下満鉄貨車に積み込みの作業後、だれとなく伝わるウラジオより内地に帰還するのだという言葉を信じながら、部隊編成のまま貨車で出発。黒河に到着したのはもう十一月。凍りついた河を渡りブラゴエシチエンスクよりはいり再びシベリア鉄道の貨車に乗車。期待したウラジオとは反対方向に進行。これが長い抑留生活の分岐点だった。列車はシベリアの大平原を一日走って三日、半日走って一週間と駅に停車。窮屈な貨車、行く先不明な長旅。体調をくずし落伍する者も出始め、どこかにおろされていった。

貨車生活一か月ウランウデ駅で下車。鉄条網で厳重に

張りめぐらされた収容所本部にはいり、将校は全員部隊編成から引き離され、下士官兵だけとなり、他の部隊と混成の班編成となり、私物検査でほとんど没収。翌日より歩哨付きの強制労働が始まる。

コウリャンのおかゆと黒パン、全く生活環境の違った不自由な生活、ノルマに追い立てられる毎日。シベリアの厳寒は満州以上、防寒具の不備などで凍傷にかかる者が続出。食料不足、栄養失調、飢えと寒さに倒れる者が多くなる。物置の遺体安置所を見て驚いた。下着だけの蠟細工のようになったコチコチの遺体が並べてあった。大木を燃やして凍土を溶かし我々に大きな穴を掘らせ、大勢の遺体を一緒に埋葬したのを見ている。

初めての冬を越えた五月ころ、多くの仲間と伐採作業のため遠く離れたハンダガヤ収容所に移る。平地林で見渡す限りの赤松カラ松、一抱えもある大木、収容所の回りは植木をぎっしり建てた柵で宿舎もお粗末なものだった。

なれない伐採作業。燕麦のかゆ、馬鈴薯だけの食事。栄養不足で体力の消耗がひどく、その上すごいシラミに悩まされ夜はたいまつを燃やしてシラミ取り、全く人間の住む環境ではなかった。伐採ノルマがどうしても達成できず、ソ連将校兵が回って来て、班長だった私にもっと仕事をさせろと拳銃を突きつけ強要。このころからノルマに応じた食事の配分が行われる。同じマスの中で操作するため仕事のできない者はますます衰弱。医務室に行っても体温計だけの診察。熱がなければ入室入院も許されず、朝、床の中でまた山道で倒れ息絶える仲間が多く出たが、混成の班のためどこの誰ともわからず、極限の生活で我が身を守るのに精いっぱいだった。作業能率不良のグループは収容所に帰るのを待って、将校兵に山へ追いかえされ、材木運搬の労役を罰として課せられた。遅いと尻をたたかれ、追われる羊の群と同じだった。私も班長の責任を問われ収容所の営倉に夜だけ入れられ減食。同じ日本人同士これ以上の強要はできなかった。

このころ、病弱者を優先に帰国が始まったと聞く。私もついに倒れ入室後、山を下り入院することができた。病院は重病人が多く毎日のように亡くなる人がいた。約一か月後退院となったが、病院の作業員として残され病

院近くの丘に亡くなった仲間を葬る墓の穴堀り作業の毎日だった。一定の間隔を置いて一人用である。冬は掘れないため夏のうちに堀り、その数は大変なものだった。この穴に入りたくない、生き抜かなければと自分に言い聞かせたものだ。

約二か月くらいで分所収容所に帰り連日作業に従事。山の収容所よりは気分的によかった。

二十二年五月ダモイの編成に乗る。内地帰国に胸をとどろかせ出発の日を待つ。ところが出発当日の点呼で名前を呼ばれず名簿に赤線、専任の梯団で二人残される。後でゲーペーウーの取り調べを受ける。疑いをかけられた以上帰れないかもしれない。絶望的な気持ちになり懲役何年の方がいいと思った。

そのあとまた山の収容所に送られ再び伐採作業。相変わらずの食料不足、ノルマ達成の強要、罵倒するソ連人、「腹いっぱい食べたら死んでもよい」と思った。

そのころより収容所はソ連政治部将校等の共産党への洗脳教育が強力に展開され、ソ連側に迎合する日本人リーダーが壁新聞の編集発行。夜は政治情報の集会など開いて社会主義を礼賛。捕虜用日本人新聞も発行され、収容所内の実権を日本人リーダーが握るようになり、この運動のため収容所内における闘争密告など、同胞相剋の惨状も起きた。ソ同盟強化こそが祖国再建の唯一の道であると労役強化が計られ、ノルマ達成も日本人同士が監視。陰口も言えなかった。これを批判した私は大衆集会に引き出され、反動分子の烙印を押されてつるし上げられた。反動分子は祖国に帰すなの引導を渡され帰国の夢も再び絶たれ、絶望的な毎日だったが、同調するのが得策と挽回の行動に出る。検閲を受ける。捕虜通信も、ソ同盟の温かい配慮により何不自由なく毎日を過ごしている、家族全員共産党に入党してくださいとも書いた。

このころ私は行く先不安にかられ、今後どうなるかを考え頭が狂いそうだった。先のことを考えず今日一日だけを考えるように努力した。運動の高まりはさらにノルマ達成の強要となり、伐採作業で多くの犠牲者を出した。

二十三年九月、帰国要員ということでウランウデ本部収容所に集結。半信半疑だった。港に接岸の引揚船に乗

船する仲間を眺めながらの作業もあった。いつ順番になるのかと待てど秋過ぎ、ついに今年最後の引揚船と聞かされ、また厳冬の冬を過ごさなければならず、どうにでもなれという気持ちになる。運動も総仕上げと作業ノルマ二〇〇％達成にエスカレート。体力的にも限界、歯を食いしばっての毎日だった。

翌二十四年九月、ついに乗船することができ、ソ連海軍の誘導で港を出るとき本当に日本の港に着くのかと疑った。台風で荒天の日本海、航行中ソ連で日本人リーダーだった連中に対する反発の空気が高まり、言い争い喧嘩が起き、海に投げ込んでやるという人たちもいた。海岸線に松の緑と草ぶき屋根を見たとき確かに日本だと胸が踊る。筋金入りの闘士としての敵前上陸の合い言葉も平穏な舞鶴入港となり、足かけ五年まる四年にわたる抑留生活から解放され、七年ぶりの祖国の土を踏むことができた。

多くの出迎えを受け故郷に帰る。しかし私の人生の中でこの七年間は何であったか。社会的、経済的な立ち遅れは大きかった。敗戦、悲惨な抑留生活の体験と帰国を夢見て祖国の土を踏めなかった多くの戦友のためにも、再び戦争を繰り返すことのないよう、後世に伝える責任がある。残された人生を恒久平和のために微力を尽くすべく努力しなければと痛感し、先祖伝来の農業に精根を傾ける日々である。

南千島択捉島守備そして ソ連強制抑留生活

鳥取県　井澤正義

終戦のちょうど一年前、昭和十九年八月十四日、豊橋第一陸軍予備士官学校を卒業し、北部軍に転属命令を受け、同日夜行列車で北海道に向け出発した。北部軍司令部にて、択捉島に駐屯する独立混成第三旅団独立歩兵第四一九大隊に転属の命を受け、直ちに根室に直行し、輸送命令を待つ。

北方四島の中で、一番広大な択捉島に一か月間駐屯した経験から、この島の当時の軍の配備等について若干紹